

令和2年度第1回米子市総合教育会議 概要

■日時

令和2年8月19日（水）午前10時から11時40分

■場所

米子市役所本庁舎5階 議会第2会議室

■議事

- (1) GIGAスクール構想について
- (2) 食育について
- (3) ふるさとキャリア教育について

■出席者

市長 伊木 隆司
教育長 浦林 実
教育委員 金山 正義
教育委員 上森 英史
教育委員 荒川 陽子
教育委員 三瓶 文乃

■出席職員

総合政策部長 八幡 泰治
総合政策部総合政策課長 長谷川 和秀
総合政策部総合政策課まちづくり戦略室長 伊藤 昭裕
総合政策部総合政策課係長 宮本 朋子
教育委員会事務局長兼教育総務課長 松田 展雄
教育委員会事務局教育総務課教育企画室長 後藤 京一
教育委員会事務局教育総務課係長 山花 竜一
教育委員会事務局学校教育課長 西村 健吾
教育委員会事務局学校教育課担当課長補佐 西山 渉
教育委員会事務局生涯学習課長 木下 博和
教育委員会事務局学校給食課長 山中 敦子
教育委員会事務局学校給食課長補佐兼給食担当課長補佐 野口 浩司

■傍聴者数

1人

■ 議事（1）GIGA スクール構想について

《事務局》

資料に沿って説明。

《上森委員》

先生方への研修を早くしてほしいとお願いしていたが、早速取り掛かってもらうことになり安心している。これを使ってどう学力保証していくか、どう使うかを研究して、良いものにしてほしい。

《金山委員》

SNS の研修を東山中で始めたところ。さらに SNS 依存やフェイクニュースに関する指導が必要。大人でも死に至ることもあるのに、子どもではとても耐えられないと思う。フィルタリングと合わせてこうした研修を深めていかなくてはならない。

《荒川委員》

次の課題として、家庭で使う場合などについての「使い方のルール」の明確化が必要になってくる。タブレット等を用いた学習と同時進行で、児童生徒や保護者に対し、ルールの周知が必要。また、今年度から使っている小学校の教科書に QR コードが掲載されている。家庭でも QR コードを読み込んで、工夫されたコンテンツにより学習を深めることができるが、家庭の環境によってできないということがないよう、環境整備についてもあわせて進めていかなくてはならないと思う。

《伊木市長》

ツールを導入しても、使い方を子どもたちに学んでもらうことが重要。

去年、子の授業参観に行った時、たまたま「ネットのルール」の内容だった。よく出来た授業で、こうして学習した子ども達は、我々大人よりしっかりしたネットリテラシーを身に付けて世に出ていくのだろうと感じた。問題が起きること自体が悪いということはない。これは問題が起きうるものなので、起きた問題に対して適切に対処し、経験を積み上げていければと思う。SNS の使い方についても、引き続き、SNS 上のいじめの防止や起きた後の対応について、教育現場の方でもしっかり子ども達に教えていってほしい。

《三瓶委員》

計画訪問で学校に出掛けて、先生や学校によって ICT の活用状況がバラバラだと感じた。研修を行うことで、統一化されていくことを期待している。

先の話になるが、一人一台端末の環境が整えば、学校に行きたくても行けない病弱児や心身症の子ども達がリモートで授業を受けられるとか、小中だけでなく高校でもリモートの授業で単位が取得できるようになれば、学校に行きたくても行けないからやめなくてはいけないという状況から抜け出せるようになるのではないかと思った。是非、子ども達に楽しく使えるものだとして教えていながら、GIGA スクール構想を進めてほしい。

《金山委員》

貧困と学力格差について調べてみると、ある団体の調査によれば、パソコンやタブレットしかない 54%、スマホしかない 32%、「ない」が 12%となっている。貧困のために環境が整っていない家庭について調べていかなくてはならないと思う。

《伊木市長》

学校に行きづらい子ども達に対して、こうしたツールを使って学力の保証をしていくことを考える時代に入ったと認識している。ただ、どういった形で実施していくのかについては議論の緒に就いたばかり。活用の仕方について考えていきたい。

また、理由は様々と思うが、貧困のためにこういったツールを使う機会がなかった子ども達も、社会に出れば使う可能性は非常に高いわけで、学校の中でベースとなる知識や使い方を身に付けていく必要がある。これが、GIGA スクール構想の一番の狙いだと考える。貧困と学力格差を縮めるツールとしていかに使っていくかということがベースになると認識している。

《浦林教育長》

日本は学校での ICT 機器の活用が、世界に比べて遅れていると言われている。学校や教員による差はこれまで一定程度あったが、こうして一人一台端末を実施することにより、どの子どもも同じように環境を整えることができた。教員の指導力については、市独自の研修を開催し、多くの教員が参加しているところ。機器を使えない教員が一人もいない米子市を目指している。

活用のルールについては、トラブルに巻き込まれない、遭遇したトラブルに正しく対応できる子ども達を育てるのを前提に、迅速な対応を積み重ね、いいものにしていきたい。

現在「すらら」を長期欠席気味のお子さんが学習できるようにオープンにしている。すでに試運転は始めており、どれだけ活用してもらえるか、どのように活用していくか、家庭の通信環境はどうなのかなど、これから様々な課題が出てくると思うが、それぞれに迅速に対応していきたいと思っている。まずは、子ども達が学習にそういった機器を十分に活用できるようにすること、そして今後、家庭でも ICT 機器を駆使して、自分に合った学びを獲得するという形に導いていきたい。

《伊木市長》

GIGA スクール構想は現在進行中の計画。また時機を見て、皆さんから意見をいただきたい。

■ 議題（2）食育について

《事務局》

配布資料に沿って説明。

《伊木市長》

今年度から、月に一度、「大山こむぎ」のパンを提供させていただくことになった。事業者の方が米子市泉の広大な耕作放棄地を開墾され、10 年経って、安定供給ができるようになったことから提供してもらえるようになった。また、「大山どり」は東京では大人気で、高価な食材でもあるが、こちらも「がいな応援基金」を活

用して、地元の子ども達に食べてもらおうとしていたところだった。コロナにより生産計画が変わったと聞いているが、何とか今年度中に実施できればと考えている。

《三瓶委員》

朝ご飯を食べないお子さんが多いと聞いているが、「こめっこ献立」や「夏休み料理教室」のように子ども達が自分でメニューを考える取組や、自分で調理するという活動は、この先に繋がっていくと思っている。「こめっこ献立」は自分の考えたメニューを市内の子ども達が食べてくれたんだという自慢になる。朝ご飯が出てこないから食べられないという子ども達が大人になったときに、「自分が子どもに朝ご飯を食べさせてあげたい」に変わっていけばという希望を持っている。

《荒川委員》

市報に給食のメニューが掲載されるのは、保護者だけでなく、市民の皆さんにも学校で子ども達が食べている物に興味を持っていただける素晴らしい取組だと思っている。できれば、中学校区ごとに栄養教諭の先生が配置され、食育を推進していただければ、より嬉しく思う。

「大山こむぎ」を使ったパンを提供してもらえるようになったことが大変嬉しい。次の議事でもあるが、地元産の「大山こむぎ」のパンを給食で食べたことが自慢となり、ふるさと教育に繋がるのではないか。

《金山委員》

市報の食育の特集の記事に「食べること」は「生きること」とある。一生懸命食べることの大切さと合わせて、地産地消、農業振興の観点も大切だと思う。私は現場時代、「早寝・早起き・朝ごはん」運動に一生懸命取り組んできた。最近は、貧困によって朝食がとれない子どもが増えてきているのではないかと思う。子ども食堂もあるが、どの子も一生懸命食べることができる環境が整えられれば。

《上森委員》

米子市の1万4千食を用意するなかで、地元産食材の割合を高めようと努力しているが、どうしても地元でない食材もある。いかにおいしい料理をつくるか、ということで栄養士さんなどが日々努力をしておられることに感謝している。

残飯の処理経費が年間500万円を超えていたこともあったと記憶している。給食というのは、ただ食べるだけではなく、命をいただくということや食材が自分の体にどのように役立つのかを学ぶ場。こうしたことを学ぶのが食育だと思う。そんな中で、地元のトリアスリートが食の大切さについて学校で話をする機会を設けられないかということ、鳥取県トリアスロン協会と協議し、実現した。この取組により、炭水化物の残飯が減ったという効果があった。ICT教育だけでなく、現場での学習とのバランスが重要だということを改めて感じた。

市内には、子ども食堂が10カ所ほど開催されている状況を見ると、給食は、昼食のみだが子どもの命を繋ぐ側面も持っており、その観点からも、重要だと考える。

《伊木市長》

現役の鉄人である上森委員から指導を受けることができ、子ども達も大変喜んでいと思う。炭水化物が

イエットというものがあるが、子ども達の栄養バランスを考えると大変危険だと思っている。トライアスリートの皆さんの指導により、炭水化物の残食が減ったというのは大変良かったんじゃないかと思う。

地産地消については厳しい数値目標は設定していない。1万4千食を安定的に、ある程度の費用で供給していくことは、地域の食材だけでは難しい状況。逆に、大規模な農地で生産される農産物については、このほかの市場でも戦えるということで、学校給食は農業振興にも役立つ。相乗効果を目指しながら、地産地消を進めていけたらと考えている。

《浦林教育長》

食についての話題というのは、どちらかというと学校と保護者の間でなされたりとか、学校給食課を中心に教育委員会事務局内で話されたりすることが昔は多かったかと思う。「大山こむぎ」「大山どり」やトライアスリートとの交流、そのほか市報の特集として取り上げていただいたり、地方紙の投稿欄に孫さんの学校給食に関する市民の声が掲載されたりするなど、食に関する取組を充実させてきたことで、多くの人に知っていただく機会が広がりを見せている。

子ども達の食の意識を高めていく間接的な取組というのも、長い時間をかけて社会の意識を高めていくことに繋がる。まだ先のある事業だと思っている。食に関する安心を深めながら進めていきたい。

■ 議題（3）ふるさとキャリア教育について

《事務局》

配布資料に沿って説明。

《伊木市長》

鳥取県では米子市を含め、県外に進学や就職で出てしまう子どもが多いので、単純にふるさとの良いところを知ってから出てほしいという思いがあってやってきた。教育委員会で、ブラッシュアップしていただき、地域の地理や自然、歴史を教育の題材にさせていただいて、そしてそれをキャリア教育に結びつけるという格好で取り組んでいただいております、ありがたい。

高専や市内の高等学校に出向いて話をしている。先日、高校普通科再編の記事があったが、米子西高との連携協定に基づく取組は、図らずもこれに先駆けた取組となった。また、昨年度は、高専、米子北高校に私が出向いて、米子の話をしたうえで、生徒たちからいろんな提案をいただいたが、驚くほど素晴らしいものだった。この段階で地域の課題を彼らに話し合ってもらうことは、教育としても良い題材になっているのではないかと考えている。皆さんの協力を得ながら、この取組を続けたいと思う。

《金山委員》

鳥取県が「蟹取県」「星取県」とダジャレのようにやっている中で、米子市でも県に倣って、もう少しブランド化してはどうかと思った。また、子ども達のモデルとなる人物として、オリンピック選手である富田選手、三上選手、入江選手。また、武尊にヒゲダン、演歌の朝花さんなどがいる。米子市の郷土資料集にも素晴らしい人物がたくさん載っている。児童生徒がまずは楽しいこと、自分の得意を見つけ、モデル化、ブランド化をしていくのが良いのではないかと思った。

教育新聞を見ていると、小中学生の子ども議会を取り上げていた。モデル人物以上になりたいというような思いを子ども議会として仕掛けていく。こうしたブランド化と、子ども自身が自分の仕事や将来について何が好きかを見つけるということやってみてもいいのではないか。

《荒川委員》

給食やフッ化物洗口など、いまは分からなくても、子ども達が大きくなって外に出ていったときに、ふるさと米子でこんな教育を受けてきたのかということに気付くことができると思うので継続してほしい。また、今は、必ずしも地元の方が地元の先生になるわけではないので、先生の研修をしていただいていることにありがたく思った。

以前、成人式で市長が「米子を好きになってほしい」と言われていたが、今年の成人式のがいな太鼓のように、あらゆる機会を捉えて米子の良さを感じられる取組をお願いしたい。先ほどの事務局の説明で、小中は教育委員会で、高校は総合政策課でということだったが、受けている側からすれば、米子で育て大きくなっていくことに区切りはないので、切れ目ない支援体制でお願いしたいと思う。

《上森委員》

一昨日の夜に、小学生のころから知っている若者から電話がかかってきた。大好きな米子の子ども達のために、自分が何かできないか、子ども達に思いを伝えたい、話がしたいと友人と盛り上がったとのことだった。米子に帰ってきて、帰ってくるのが出来なくても米子のことが大好きだという若者たちに、米子市でこれまでやってきた教育は間違っていなかったと感じた。エネルギーをもって地元のために何かをしたい若者に、県外でも地元でも組織が何かを作っていて、若い力を発揮できたらと思った。米子に育てよかった。米子のために何かしたいと思う若者を育てることが大切だと思う。

《三瓶委員》

地域活動や子ども会に参加しない家庭が増えているなか、ふるさと教育が歯止めになるのではないか。近所や地域の方と繋がりを持つことで子どもの自信に繋がる。自己肯定感が高まり、幸せな大人になっていく。県外に出た時に、米子で育ってきたから自分は今幸せなんだという気持ちを胸に、いつか米子に戻りたいという気持ちに変わっていく子も出てくると思う。地域の資産を子ども達にたくさん触れさせてあげてほしい。

《浦林教育長》

成人式の作文に、米子はどんなところと聞かれて、何も答えられなかった、というのがあって、とてもショックを受けた。これまで、地域のことは生活科や社会科や総合的な学習の時間で相当な時間をかけてやってきたはずだった。それぞれやってきてはいるが、体系的にまとまっていないので、ふるさと教育として実感できていなかったのではないかと感じた。子ども達は、知識はあっても、ふるさととして振り返る力が付いていないということもある。こうしてふるさとキャリアパスポートの形になることで、教員の指導の意識も変わっていくことを期待している。進学で県外に出た時も、これを持って行くことで、ふるさとで育った自分について振り返ってもらえればと思う。成人式で米子のことを、もういいと言われるほどしゃべったという子どもが現れることを願っている。